

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和6年度病害虫発生予察情報について

このことについて、発生予報第12号（3月）を発表したので送付します。

鹿児島県病害虫防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL 099-245-1081 (代表)
099-245-1157 (直通)
099-245-1149 (FAX)

ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海等への汚染防止)
(養蚕，養蜂等への危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

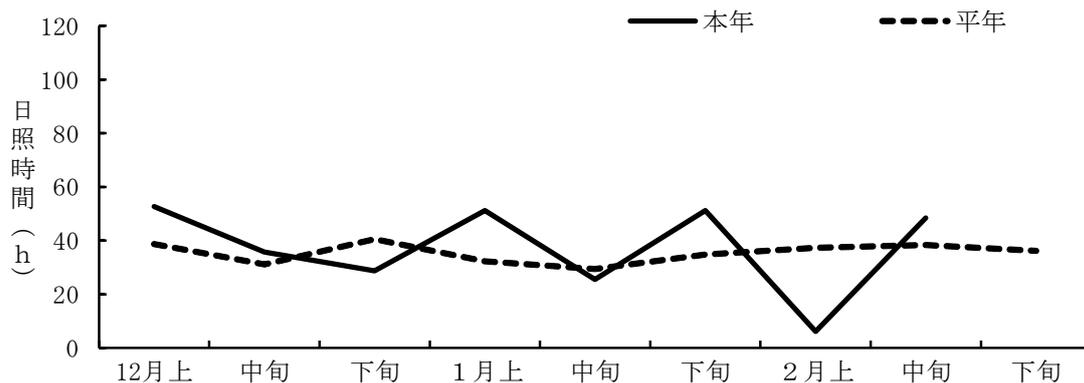
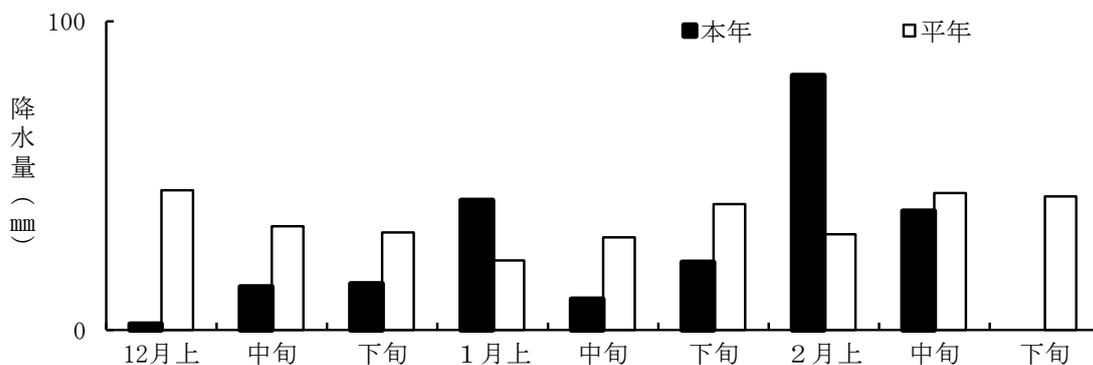
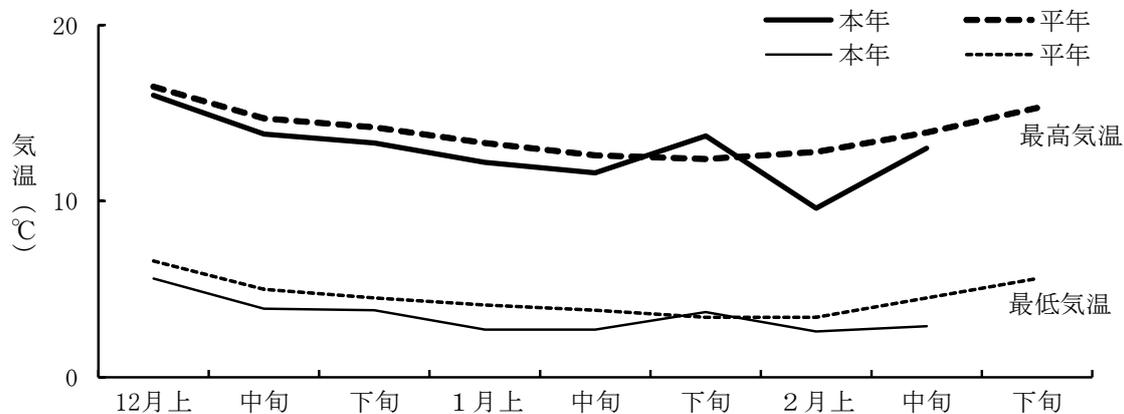
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（3月1日から3月28日） 令和7年2月27日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	20	40	40	九州南部は気温は平年並か高く、降水量と日照時間はほぼ平年並。奄美地方は気温は平年並、降水量は平年並か少なく、日照時間はほぼ平年並の見込。
	奄美地方	30	50	20	
降水量	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	40	40	20	
日照時間	九州南部	30	40	30	
	奄美地方	30	30	40	

II. 12～2月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名等	発生量	
			現況	予報
普通作物	サトウキビ	メイチュウ類	並	並
野菜	キュウリ	べと病	やや少	やや少
		退緑黄化病	多	多
		黄化えそ病	多	多
		コナジラミ類	並	やや多
		アザミウマ類	並	やや多
	トマト	灰色かび病	やや少	やや少
		うどんこ病	やや多	やや多
		コナジラミ類	並	やや多
	ピーマン	斑点病	やや少	やや少
		うどんこ病	やや多	やや多
		アザミウマ類	並	やや多
	イチゴ	アザミウマ類	やや少	やや少
		ハダニ類	並	やや多
	キャベツ	菌核病	多	多
	エンドウ類	褐紋病・褐斑病	少	少
		うどんこ病	並	並
		ハモグリバエ類	少	やや少
		アザミウマ類	少	やや少
	バレイショ	疫 病（県本土）	並	並
		” （熊毛地域）	やや少	やや少
” （奄美地域）		少	少	
花き	キ ク	ハダニ類（県本土，施設）	並	やや多
		アザミウマ類（県本土，施設）	少	やや少
茶樹	チャ	赤焼病	並	並
		チャノコカクモンハマキ	並	並
		チャハマキ	並	並
		カンザワハダニ	並	並

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. サトウキビ

(1) メイチュウ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 奄美地域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

2月中旬トラップ誘殺虫数

イネヨトウ2.0頭 (平年2.9頭)

：並

カンシャシクイハマキ2.4頭

(平年8.6頭)

：少

ウ 防除上注意すべき事項

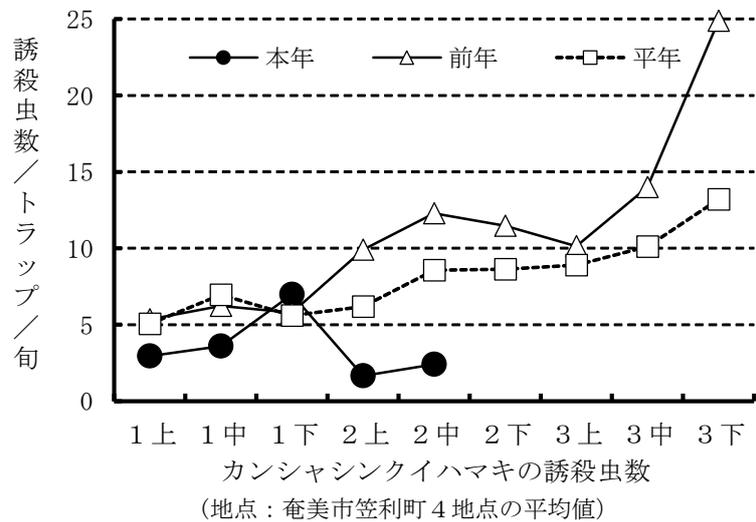
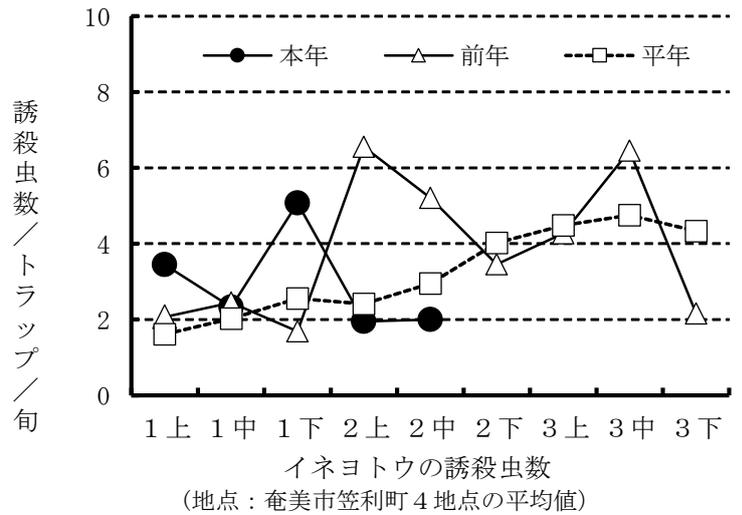
(ア) ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯等から食入し、生長点や茎内を加害するため、防除が困難である。

(イ) 秋植えや収穫の早かった株出しなどは被害を受けやすいため、培土時および生育初期の予防が重要である。

(ウ) 植付時は土壌害虫の防除を兼ねた農薬(粒剤)を選択し施用する。植付時に粒剤を処理した場合、残効は40日程度を目安とし、被害を確認しながら、防除する。

(エ) 生育期は薬液が葉鞘内にも浸透するように丁寧に散布する。

(オ) ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。



防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ

(1) サツマイモ基腐病

次作の発病リスクを軽減するために、以下の防除対策を徹底する。

<育苗床>

ア 育苗床では、萌芽の確認や育苗管理及び採苗作業で繰り返し出入りするなど、再汚染のリスクが極めて高いため、育苗床専用の長靴や手袋などを使用する。

イ 萌芽した芽に変色やしおれ症状が見られた場合は、直ちに種いもごと抜き取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。また、萌芽せずに腐敗した種いもも掘り取り、同様に処分する。抜き取り後は、速やかに銅剤を散布する。

<採苗>

ア 基腐病等の感染を抑えるため、地際部から5 cm（2～3節）以上の高さの位置で採苗する。

イ 採苗するハサミの刃先は、こまめにバーナー等であぶって殺菌・消毒する。

ウ 苗消毒は、採苗後速やかに行う。薬液は、日光や汚れなどで消毒効果が減少するため、使用日ごとに毎回調整する。

<ほ場の準備>

ア 排水不良なほ場は耕盤破碎や明きよの設置を行い、ほ場外への排水を促す。

イ 排水路側の枕畝は表面排水を妨げるため作らない。枕畝を作った場合は、その途中に排水溝を設置する。また、ほ場外の排水路は、つまりがないか確認する。

ウ 前作で発生が多かったほ場では、植付前にフrintフロアブル25の全面散布土壌混和またはフロンサイドSCの全面散布土壌混和を行う。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県 (https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20240315133011-1.pdf, https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20221226173000-1.pdf), 農研機構 (https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf) をご覧ください。



鹿児島県
サツマイモ基腐病防除
対策マニュアル(第4版)
令和6年3月改訂



鹿児島県
さつまいも育苗の
ポイント
(令和4年12月)



農研機構
サツマイモ基腐病の
発生生態と防除対策
(令和4年度版)

Ⅱ. 野菜

1. キュウリ

(1) ベと病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

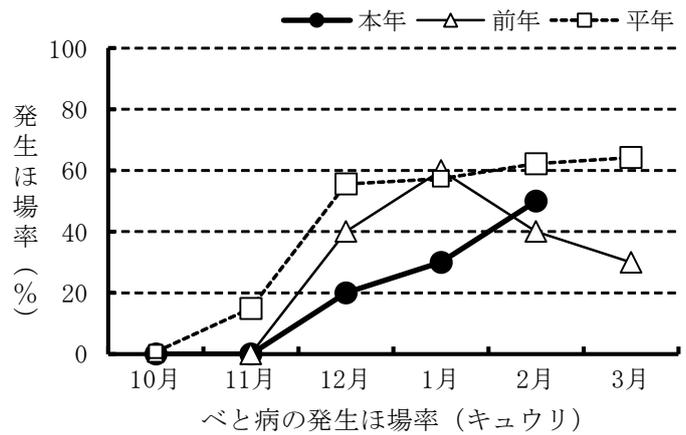
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率50%（平年62%）

：やや低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウスの通風換気に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので、早めに防除する。
- (エ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布に努める。
- (オ) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。



(2) 退緑黄化病 (令和6年度技術情報第21号, 12月4日付け 参照)



ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

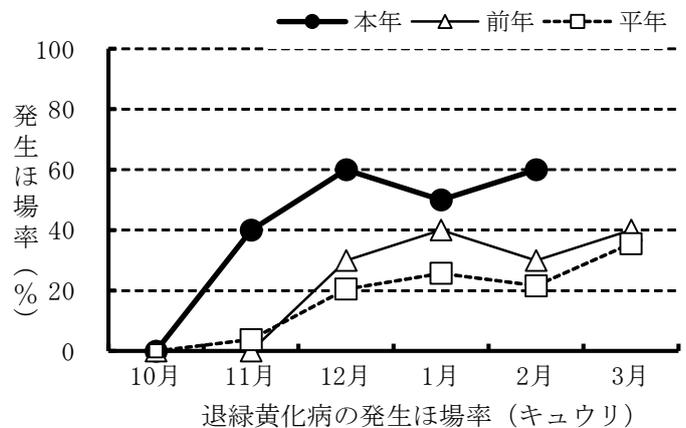
- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率60%（平年22%）
：高い（＋）

発生程度の高いほ場を認めた（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 病原ウイルス（CCYV）がコナジラミ類によって媒介されるため、コナジラミ類の防除を徹底する。

- (イ) 発病株は伝染源となるので、ほ場の見回りを行い、発病株を認めたら早急に抜き取り、処分する。



(3) 黄化えそ病 (令和6年度技術情報第21号, 12月4日付け 参照)



ア 予報内容

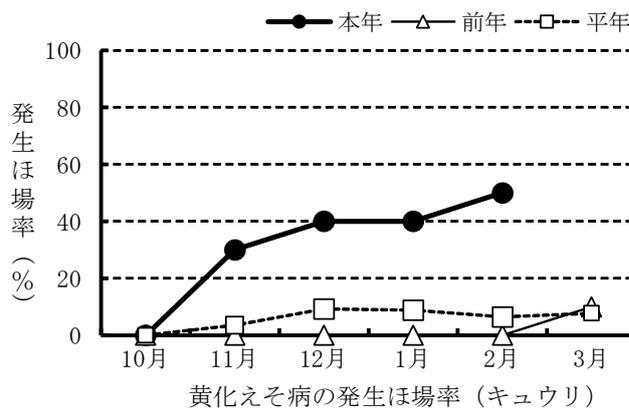
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率50% (平年8%)：高い (+)
発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 病原ウイルス (MYSV) がアザミウマ類によって媒介されるため、アザミウマ類の防除を徹底する。
- (イ) 発病株は伝染源となるので、ほ場の見回りをを行い、発病株を認めたら早急に抜き取り、処分する。



(4) コナジラミ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

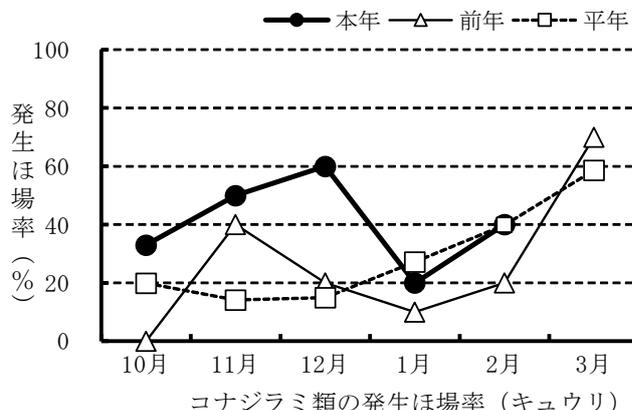
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率40% (平年40%)：並

(イ) 気象予報

気温：平年並みか高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 黄色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 天敵を導入しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
- (ウ) 作用性の異なる農薬 (RACコード参照) のローテーション散布に努める。



(5) アザミウマ類

ア 予報内容

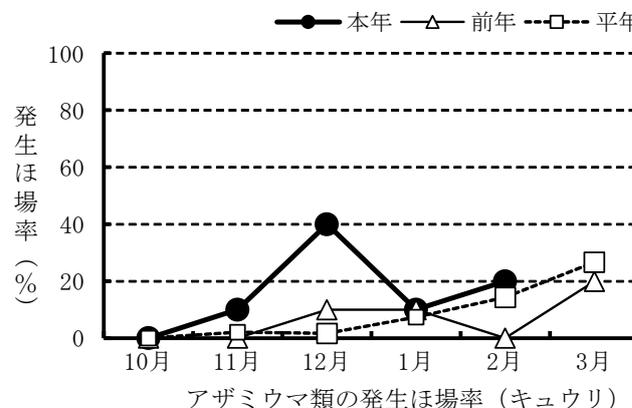
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率20% (平年16%)：並

(イ) 気象予報

気温：平年並みか高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 青色粘着トラップを設置し，早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 天敵を導入しているほ場では，天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布に努める。

2. トマト

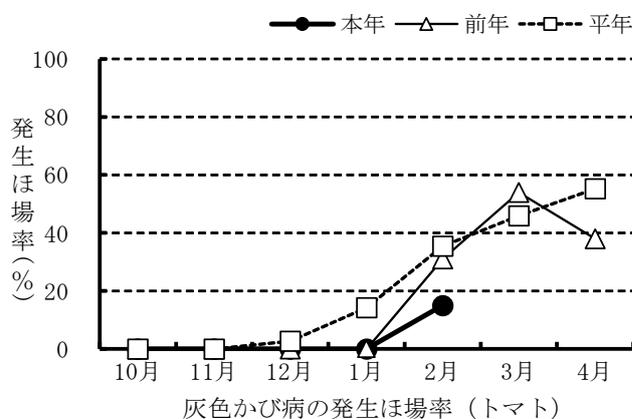
(1) 灰色かび病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率15%（平年35%）
：やや低い（－）



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行ない，過湿にならないよう努める。
- (イ) 果実部やへたの付近に付着する花弁は本病の発生源となるので，こまめに除去する。
- (ウ) 発病葉や発病果実は早めに除去し，施設から持ち出して処分する。
- (エ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

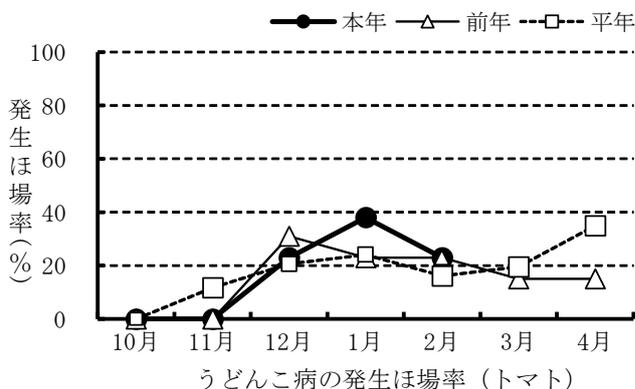
(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率23%（平年16%）
：やや高い（＋）



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので，適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し，施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので，初期防除に努める。
- (エ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(3) コナジラミ類 (令和6年度技術情報第25号, 12月26日付け 参照)



ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

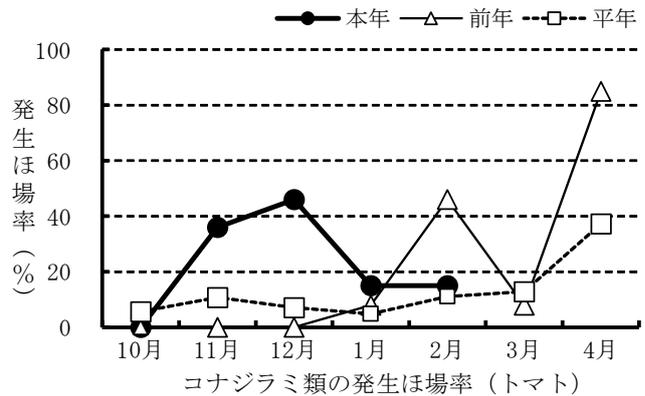
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率15% (平年11%)：並

- (イ) 気象予報
気温：平年並みか高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) トマト黄化葉巻病やトマト黄化病の病原ウイルス (TYLCV, ToCV) を媒介する。黄色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 作用性の異なる農薬 (RACコード参照) のローテーション散布に努める。
- (ウ) 農薬によっては、マルハナバチに影響があるので選定に注意する。



3. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

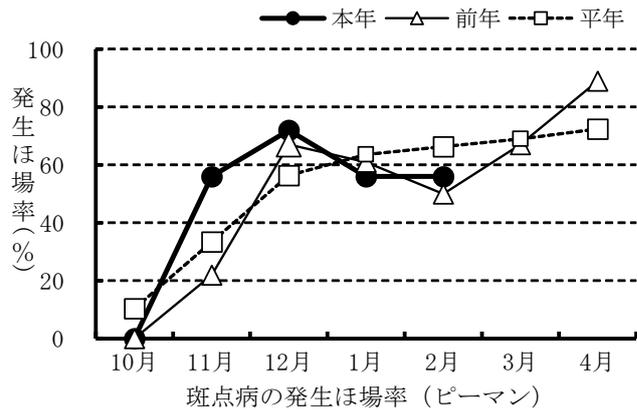
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率56% (平年66%)
：やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (イ) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (エ) 作用性の異なる農薬 (RACコード参照) のローテーション散布に努める。



(2) うどんこ病

ア 予報内容

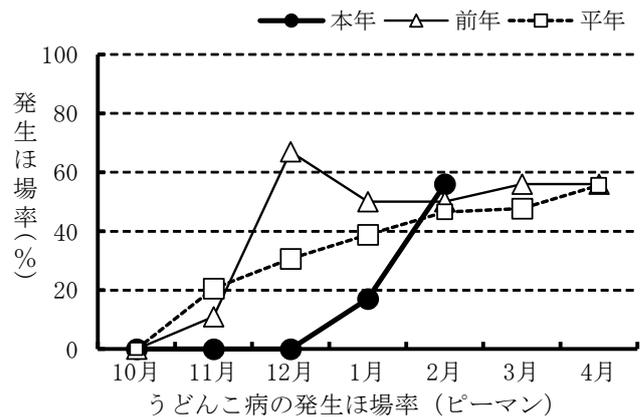
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場56%（平年46%）
：やや高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (イ) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

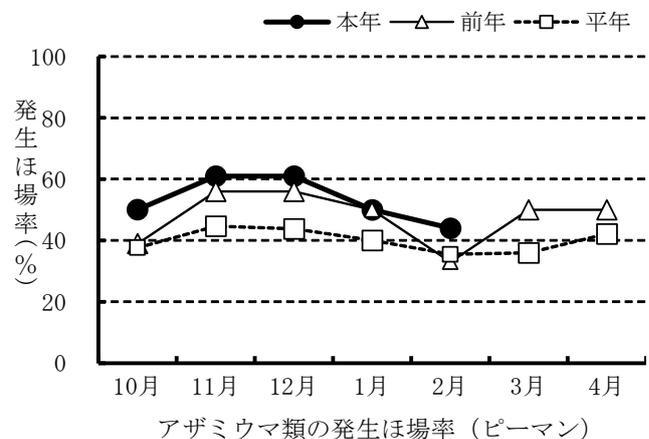
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率44%（平年35%）：並
- (イ) 気象予報
気温：平年並みか高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウス開口部等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 花や新芽の中など薬液のかかりにくい場所に生息するので、散布は丁寧に行う。
- (ウ) 天敵を放飼しているほ場では、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (エ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布に努める。



4. イチゴ

(1) アザミウマ類

ア 予報内容

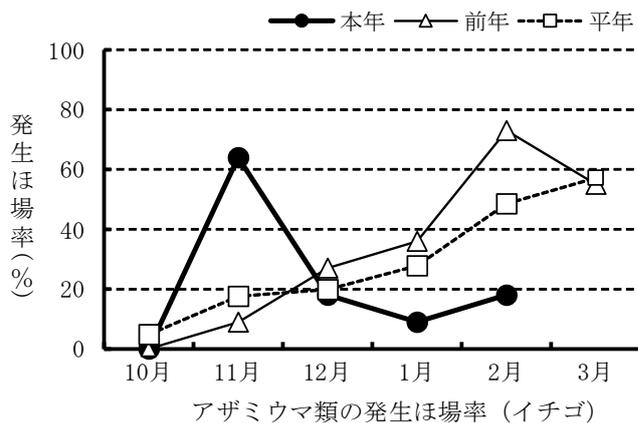
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率18%（平年48%）：低い（-）
発生程度の高いほ場を認めた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウス開口部等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 花の中など薬液のかかりにくい場所に生息するので、散布は丁寧に行う。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布に努める。
- (エ) 農薬によっては、ミツバチに影響があるので選定に注意する。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

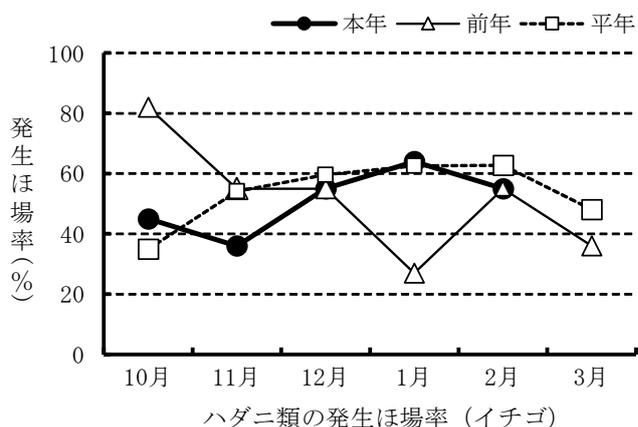
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率55%（平年63%）
：やや低い（-）
発生程度の高いほ場を認めた（+）

(イ) 気象予報

気温：平年並みか高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
- (イ) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布に努める。
- (エ) 農薬によっては、感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。



5. キャベツ

(令和6年度技術情報第28号, 2月21日付け 参照)



(1) 菌核病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 対象作型 春どり

(ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率72% (平年27%)
：高い (+)

(イ) 気象予報

気温：平年並みか高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 菌核病は、子のう胞子の飛散等に

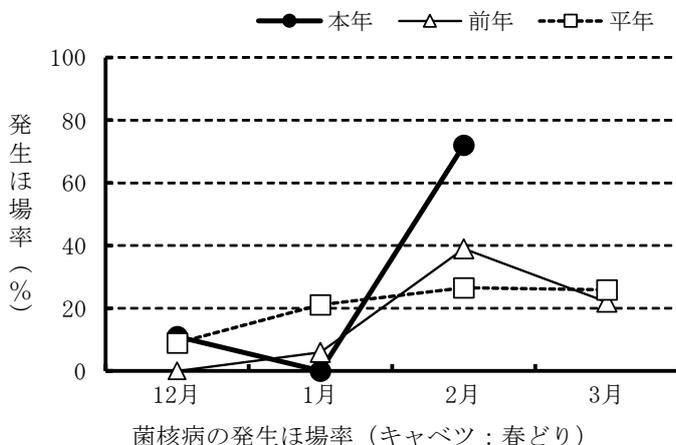
より、外葉などの株元、時には結球部位からも感染するため、農薬は株全体に十分かかるように散布する。

(イ) 農薬散布の際は、展着剤を加用するとともに、特に、結球中期以降のほ場では、浸透移行性のある農薬 (FRACコード7, 11など) を組み合わせて、ローテーション散布を行うことで、防除効果が高まる。

(ウ) 農薬散布にあたっては、使用基準を遵守し、周辺ほ場にドリフトがないよう注意する。

(エ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となるので、ほ場外へ持ち出し、適正に処分する。

(オ) 収穫終了後は、次作の伝染源を減らすために、残さを速やかにほ場外に持ち出し、適正に処分する。また、残さ持ち出しが困難な場合は、早期耕耘等により残さの分解を促す。



6. エンドウ類

(1) 褐紋病・褐斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 少

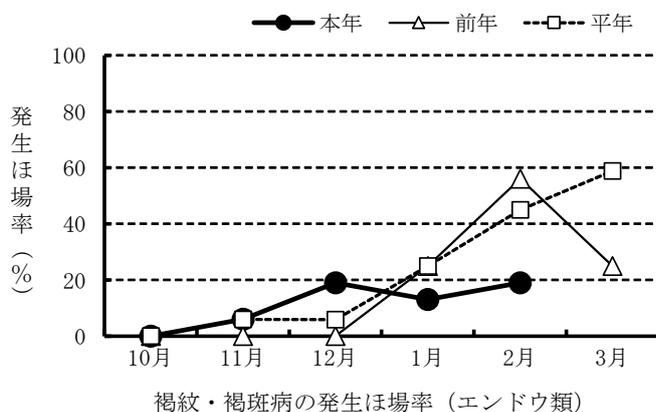
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率19% (平年45%)
：低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 排水不良のほ場では多発しやすいので、排水対策に努める。

(イ) 早期発見に努め、発生を認めたら直ちに防除を行う。



(2) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率19% (平年25%)

：並

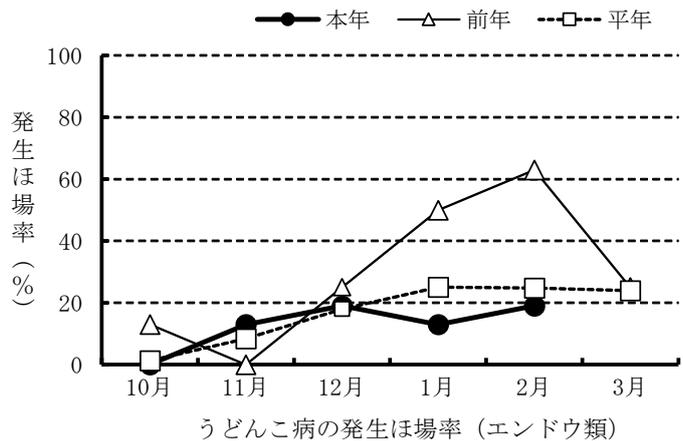
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) かん水不足や着莢負担等による草勢低下で発生しやすいため、適正な管理に努める。

(イ) 多発するとごま症の発生につながるため、初期防除に努め、下位葉の葉裏まで農薬が十分かかるように散布する。

(ウ) 既に発生しているほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。

(エ) 作用性の異なる農薬 (RACコード参照) とのローテーション散布を行う。



(3) ハモグリバエ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率0% (平年50%)

：低い (-)

(イ) 気象予報

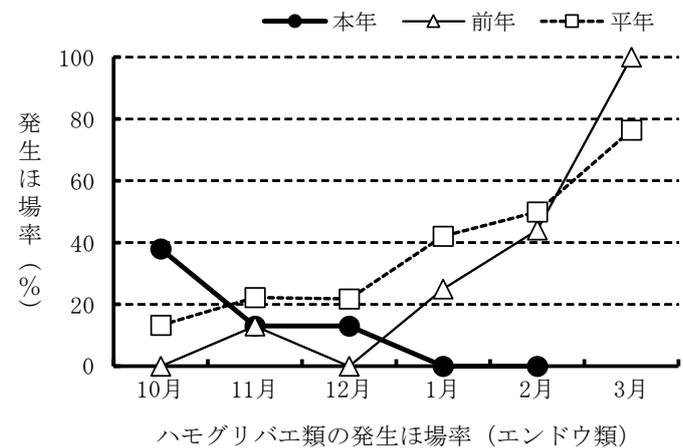
気温：平年並みか高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 葉に産卵痕があるかを観察し、認めた際は早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏にも十分かかるよう散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬 (RACコード参照) とのローテーション散布を行う。



(4) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

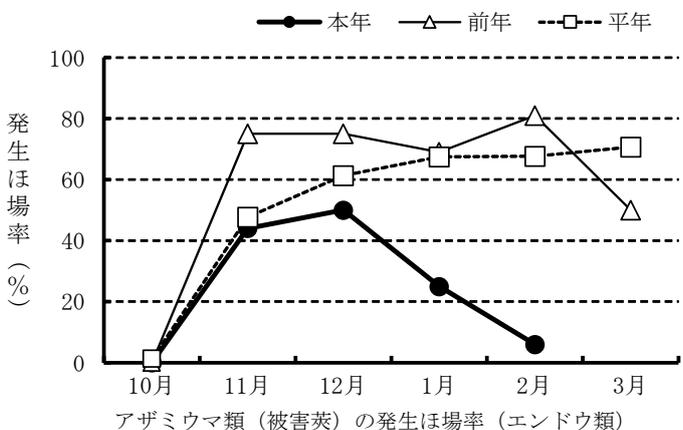
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率6% (平年68%)

：低い (-)

(イ) 気象予報

気温：平年並みか高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類は花の子房部分に産卵し、「白ぶくれ莢」となるので、若莢の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を把握し、初期防除に努める。
- (イ) 薬液のかかりにくい花卉の奥に寄生するので、丁寧な農薬散布に努める。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

7. バレイシヨ

(令和6年度技術情報第23号, 12月25日付け 参照)



(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 対象作型 春作
- (ウ) 発生量 県本土：並
熊毛地域：やや少
奄美地域：少

イ 予報の根拠

<県本土>

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率0%（平年3%）：並

<熊毛地域>

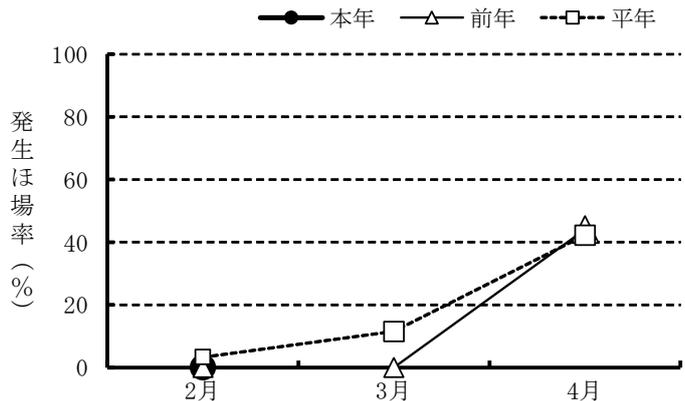
- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率0%（平年33%）
：やや低い（-）

<奄美地域>

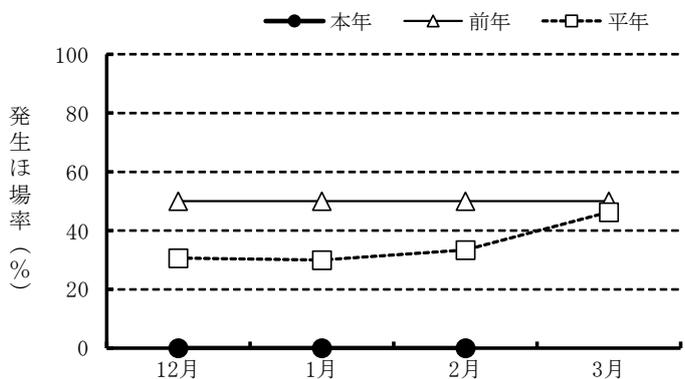
- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率17%（平年58%）
：低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

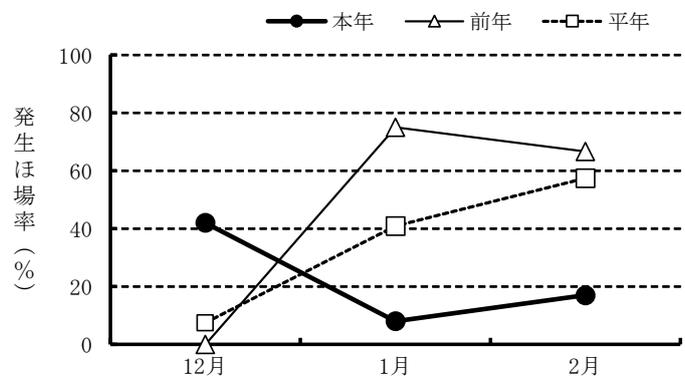
- (ア) ほ場の見回りをを行い、発生が認められたら直ちに治療効果のある農薬の散布を行う。その後は、進展状況に応じて7～10日後に追加散布を行う。
- (イ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。
- (ウ) 収穫が遅れると被害拡大につながるため、適期収穫を行う。
- (エ) 発病株は次年度の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適正に処分する。



疫病の発生ほ場率 (バレイシヨ：県本土)



疫病の発生ほ場率 (バレイシヨ：熊毛)



疫病の発生ほ場率 (バレイシヨ：奄美)

.....

防除に関する今月の留意事項

1. 露地野菜の寒害・霜害

- (1) 寒害・霜害を受けたほ場では草勢が低下し、病害が発生しやすくなる。予防散布や早めの農薬散布に努める。
- (2) 速効性肥料の追肥や葉面散布を行い、草勢の回復を図る。
- (3) エンドウ等では、気温が高くなると、霜害を受けた下位葉から灰色かび病が蔓延する可能性があるため、注意する。

2. その他野菜の残さ処理等について

- (1) 菌核病や軟腐病をはじめ、収穫後の残さは次作に対して様々な病害虫の伝染源（発生源）となるので、速やかにほ場外へ持ち出し、適切に処分する。ほ場外への残さ持ち出しが困難なほ場では、複数回の耕耘により残さの分解を促す。
- (2) 菌核病が多発したほ場では、連作を避け、イネ科牧草等の輪作により菌密度の低下を図る。

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 30%（平年28%）：並

(イ) 調査結果 気象予報

気温：平年並か高い（+）

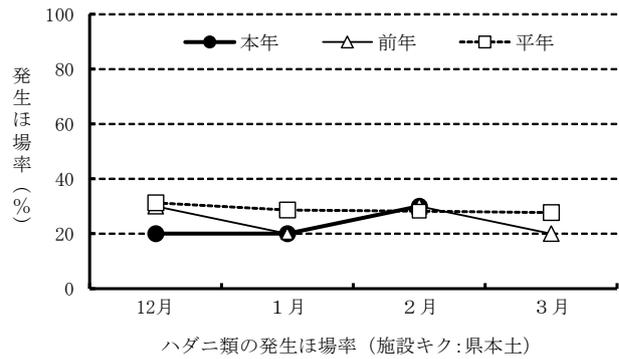
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いため、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(2) アザミウマ類（令和6年度技術情報第26号，2月3日付け 参照）



ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 10%（平年23%）

：低い（-）

(イ) 調査結果 気象予報

気温：平年並か高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類の発生動向を把握するには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クログハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。

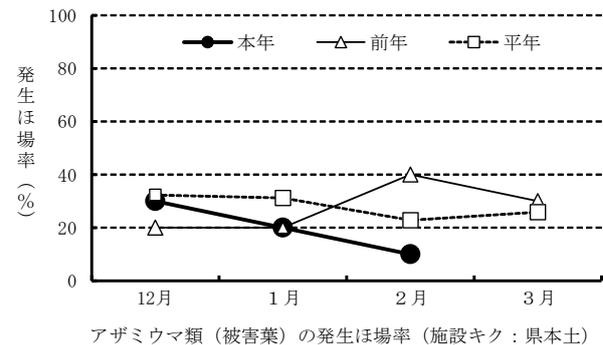
(イ) クログハナアザミウマは中下位葉に主に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め、発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(カ) 母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。



IV. 果 樹

防除に関する今月の留意事項

1. カンキツそうか病, カンキツかいよう病

発芽前～発芽期の防除が重要で, 以下の点に留意して防除対策に努める。

- (1) せん定が終わっていないほ場では罹病葉の除去に努め, 伝染源となる越冬病斑量を少なくする。
- (2) そうか病は, 春葉への感染を防ぐため, 生育状況をよく観察し発芽期の防除適期を逸しないよう努める。
- (3) かいよう病は発芽前・発芽期防除に重点を置き, 春先の菌密度を低く抑える。

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 赤焼病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率0%（平年0%）：並

1㎡当たり病葉数0.0枚（平年0.0枚）：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 赤焼病は強風を伴った降雨時に感染が拡大しやすく、寒害や霜害により発生が助長される。本年の1～2月は、強風下の降雨日や低温の日数が平年（過去10カ年平均）より多く、赤焼病の発病に好適な条件となっており、園地を見回るなど、初発を見逃さないように努める。

(イ) 初発生を確認した園地では速やかに防除し、発生の激しい園では3月までに数回の防除を行う。また、常発園では強風雨の直前・直後や春整枝直後などで葉に傷が生じる場合に防除を行う。

(ウ) 農薬は、初発確認直後では抗生物質と銅との混合剤（カスミンボルドー、銅シン水和水剤）を、その後は銅水和水剤を散布する。

(エ) 発病は、幼木園および耐病性が弱い品種(注)で発生しやすい。

注) 県奨励品種の赤焼病耐病性：極弱：かなやみどり，はるもえぎ，弱：はるみどり，あさのか，ゆたかみどり，やや弱：さえみどり，やぶきた，くりたわせ，中：あさつゆ，強：おくみどり，吉田（2016）による枕崎市における圃場接種試験を引用，一部改変

(2) チャノコカクモンハマキ，チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生時期 チャノコカクモンハマキ：遅い
チャハマキ：遅い

(ウ) 発生量 チャノコカクモンハマキ：並
チャハマキ：並

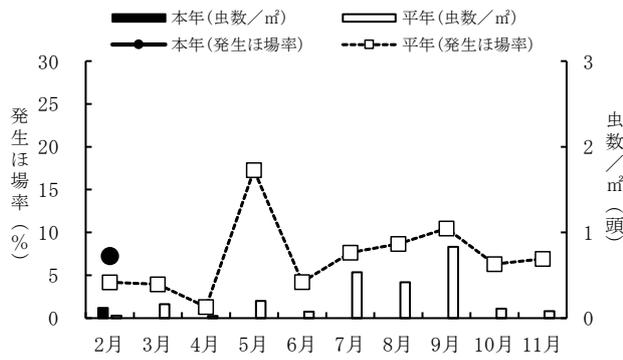
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

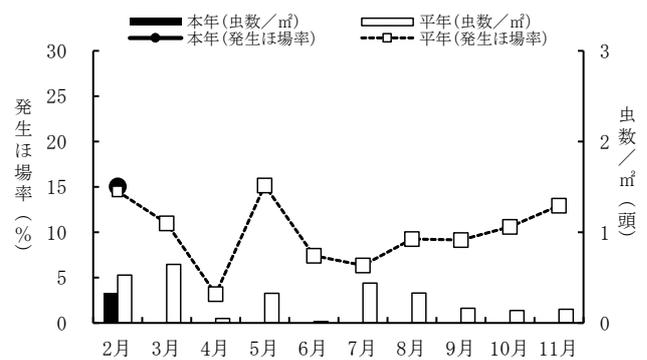
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
発生量	並	並
発生ほ場率	7%（平年 4%）：やや高い（+）	15%（平年 14%）：並
虫数（1㎡当たり）	0.12頭（平年0.03頭）：多（+）	0.32頭（平年0.53頭）：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 性フェロモン剤（ハマキコン-N）を用いて防除する場合、越冬世代成虫羽化前（3月中旬頃）を目安に設置する。



チャノココクモンハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数

(3) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 33% (平均 35%)：並

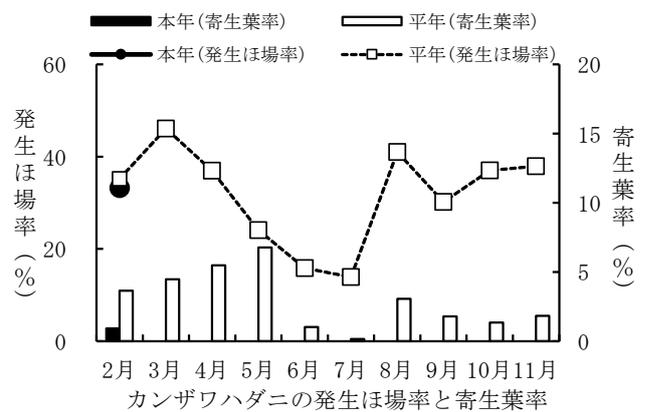
寄生葉率 0.9% (平均 3.7%)

：やや低い (ー)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 平均気温が10℃を超えると産卵・増殖が盛んとなり寄生密度が急増するので、ほ場での発生状況を把握し、春期防除を行う。

(イ) 薬液は、裾部・葉裏に十分かかるように留意する。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+）、（-）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。